

K-2153



(19)日本国特許庁(JP)

(12)公開実用新案公報(U)

(11)実用新案出願公開番号

実開平6-81275

(43)公開日 平成6年(1994)11月22日

(51)Int.Cl.⁵

A01K 95/00

識別記号

庁内整理番号

C 8303-2B

FI

技術表示箇所

審査請求 未請求 請求項の数1 FD (全2頁)

(21)出願番号 実願平5-28634

(22)出願日 平成5年(1993)4月30日

(71)出願人 593102699

真喜志 辰夫

沖縄県宜野湾市宇地泊492番地

(72)考案者 真喜志 辰夫

沖縄県宜野湾市宇地泊492番地

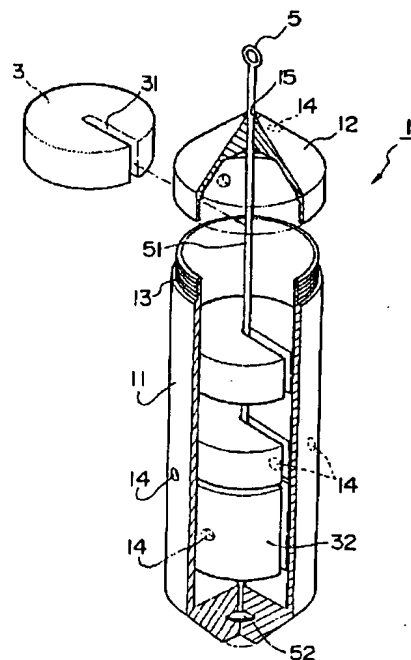
(74)代理人 弁理士 小橋川 洋二 (外1名)

(54)【考案の名称】 釣用おもり

(57)【要約】

【目的】重さを調整することができる釣用おもりを提供する。

【構成】蓋部12と本体11とから成る円筒状の容器1に複数個の調整用おもり3を出し入れ自由に収容できるようにし、前記蓋12または容器本体11に釣糸を取り付ける糸取付部5を設けた。



1

2

【実用新案登録請求の範囲】

【請求項1】 蓋部と本体とから成る円筒状の容器に複数個の調整用おもりを出し入れ自由に収容し、前記蓋または容器本体に釣糸を取り付ける糸取付部を形成したことを特徴とする釣用おもり。

【図面の簡単な説明】

【図1】 本考案による釣用おもりの一部切欠き斜視図である。

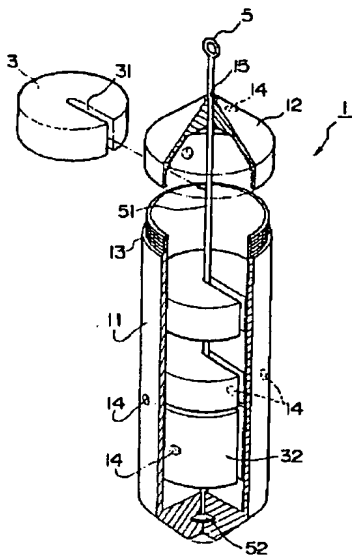
【図2】 図1の釣用おもりの一部断面正面図である。 *

*【図3】 本考案の釣用おもりの使用状態を示す図である。

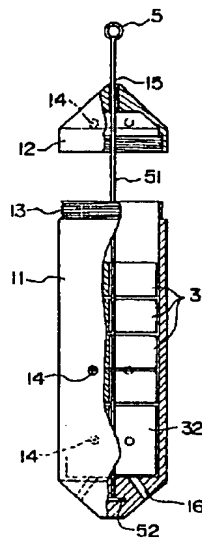
【符号の説明】

- 1 容器
- 11 本体
- 12 蓋
- 3 調整用おもり
- 5 糸取付部

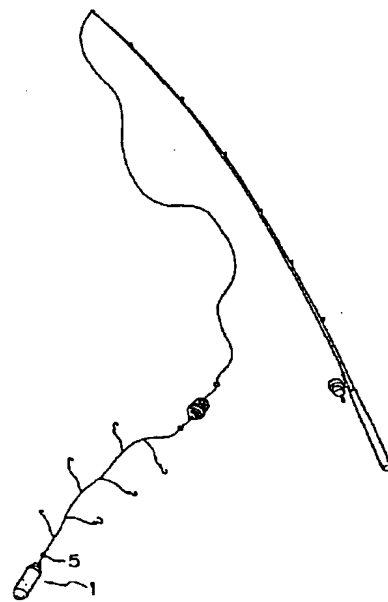
【図1】



【図2】



【図3】



【考案の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】

本考案は、重さの調整ができる釣用おもりに関する。

【0002】

【従来の技術】

沖釣のとき使用するおもりは潮の流れや水深に応じて重さを変える必要がある。たとえば潮の流れが速いときや水深が深いときは、潮に流されないように又は浮力に負けないようにするため比較的重いおもりを使用し、その逆のときは軽いおもりを使用する。

【0003】

【考案が解決しようとする課題】

従来の釣用おもりは、その重さが決っていて調整することができなかった。そのため、釣人は何種類ものおもりを釣場まで持っていかなければならず、その負担は非常に大きなものであった。本考案はこの点にかんがみてなされたもので、重さを調整することができる釣用おもりを提供することを課題とする。

【0004】

【課題を解決するための手段】

上記課題を解決するために、本考案においては、蓋部と本体とから成る円筒状の容器に複数個の調整用おもりを出し入れ自由に収容できるようにし、前記蓋または容器本体に釣糸を取り付ける糸取付部を設けるようにした。

【0005】

【実施例】

本考案の一実施例を図1および図2を参照して説明する。図に示すように、本考案の釣用おもりは、円筒状のプラスチック製容器1と、容器1に収容される複数の調整用おもり3と、容器1に釣糸を取り付けるための糸取付部5とから構成される。

【0006】

容器1は、容器本体11と蓋12とから成り、容器本体11と蓋12とはネジ

部13において着脱自在に結合される。蓋12は円錐状になっておもりを引上げたときの水の抵抗を減らすようにしてある。容器本体11および蓋12には、水および空気抜き用の小孔14が多数形成され、容器本体11の底部には小孔16が形成されている。

【0007】

糸取付部5は、ステンレスバー51の一端に形成されており、ステンレスバー51の他端には抜け止め用の板材（または線材）52が固着され、板材52は容器本体11の底部に埋設されている。蓋12の頂端には穴15が形成されて、穴15にはステンレスバー51が挿通される。糸取付部5は環状に形成されて、その環に釣糸を結ぶようにする（第3図参照）。糸取付部5の径は穴15の径より大きくしてあり、したがって蓋12がステンレスバー51から外れることはない。

【0008】

調整用おもり3は円柱状の鉛から成り、円周部から中心部にかけて1本のスリット31が形成されている。スリット31の幅はステンレスバー51の径より大きくしてある。容器本体11の底部には基本おもり32が配置され、その上に調整用おもり3がスリット31にステンレスバー51を通して配置される。実施例では、基本おもり32は30号、各調整用おもり3は10号を使用している。しかし各おもりの号数はもちろん自由に決めてよい。また基本おもり32は常時容器内に収容されているが、とくに基本おもり32を設けることなく調整用おもり3だけ使用してもよい。

【0009】

さて、上記おもりを使用するときは、まず蓋12を容器本体11から外して、基本おもり32の上に調整用おもり3を必要な数だけ容器本体11に入れる。調整用おもり3を入れるときは、スリット31にステンレスバー51を通し、その後は調整用おもり3の自重で容器本体11内にステンレスバー51に沿って落下せればよい。所望の数だけの調整用おもり3を入れた後は蓋12を締めて、おもり全体を海へ投入すればよい。おもりが海中へ沈んでいく途中で小孔14、16を介して海水は容器1内へ浸入し、容器1内の空気は海中へ排出される。海中

では、おもり3, 32の全重量は容器本体11の底部にかかりステンレスバー51でしっかりと支えられる。おもり3, 32は容器1に包まれているからステンレスバー51から離脱することはない。おもりを海中から引上げると、小孔14, 16を介して海水は排出され空気が入ってくる。

【0010】

以上のように、上記釣用おもりを使用すれば、調整用おもり3の数を調整するだけで簡単におもりの重量の調整ができる。そのため、従来のように重さの異なるおもりを幾つも準備する必要はなくなり、釣人の負担は大幅に軽減される。釣船内で隣同士の釣人が上記釣用おもりを使用すれば、隣の釣人とおもりの重さを簡単に合わせることができるので、おもりの重さの違いから生じるトラブル（隣合う釣糸同士のまつわり）を回避することができる。

【0011】

上記実施例においては、ステンレスバー51を容器本体11の底から延長させて蓋12を取り付け、ステンレスバー51の先端に糸取付部5を形成したが、本考案はそれに限らず、ステンレスバー51を設けずに、糸取付部を蓋12や容器本体11に直接設けるようにしてもよい。ただし、糸取付部を蓋12や容器本体11の底面に設けた場合、蓋と本体との係合はネジ部13だけでは十分ではなく、おもりを引張ったときに蓋が抜けるおそれがあるので、蓋を本体にしっかり止めるための止め具が必要になろう。上記実施例によれば、ステンレスバー51に全重量がかかるので蓋12が抜けるということはなく、しかもステンレスバー51は蓋12を貫通して糸取付部5によって蓋12を制止できるので、蓋12が容器本体11から離脱することがないという利点がある。

【0012】

ネジ部13を容器の長さ方向（図1, 2の縦方向）に長く形成すれば、蓋12の移動幅が大きくなり、調整用おもり3の数が少ない場合であっても、蓋12を深く締め込むことにより調整用おもり3が容器1内でガタつくことを防止できる。

【0013】

【考案の効果】

以上説明したように、本考案によれば、釣用おもりの重さを調整することができるという効果が得られる。